Osaka University of Foreign Studies

スラブ語の「娘」をめぐって

神山孝夫

はじめに

印欧祖語の「娘」に当たる語は一般に *dhug(h)ǝter-(Pokorny), *dhugh(ǝ)ter-(Buck), *dhughǝter-(Watkins)のように再建され、多くの印欧諸語にその対応する形が見出される。しかし、広く用いられている上記三つの印欧語辞典が僅かながら異なる形を立てていることからも推測できるように、これらの再建形には未解決の問題が含まれている。この問題に正面から取り組むと、現代の印欧語比較言語学の最前線である喉音理論の領域に入ってしまい、もはや筆者の能くするところではない。だが、スラブ語に於けるこの語の末裔を扱う前提として、印欧語に於ける「娘」を表す語の再建上の問題点を整理することを小文の目的の一つとした。

「娘」に当たる印欧祖語の形として仮に上記の Buck の *dhugh(ǝ)ter- の( )中の schwa(ǝ) を除いた形である *dhughter- を想定してみると、一般にスラブ語は印欧祖語の帯気音を全て無帯気音にしたためスラブ語の仮想される最古の段階である早期スラブ祖語 (early PS) の形は *dugter->*dukter- となる。その後スラブ語は音節の長短の対立を失い、量の差を質で表すようになる。 長い ū から y (恐らく非円唇中舌高母音[ɨ]) を、短い u から ъ (恐らく若干円唇化した後舌の中高母音) を獲得して、分岐する前のスラブ語、すなわち後期共通スラブ語 (late CS) の語幹 *dъkter- に到達する。小文では簡略のため早期スラブ祖語と後期共通スラブ語を「スラブ祖語」(PS)、「共通スラブ語」(CS) と略称する。[1)]

この CS の形 *dъkter- からスラブ諸語が更に分岐する。問題となるのは単数主格に於いて CS. *dъkti のように語幹末の要素 -er- が脱落して語尾が -i になってしまっていることと、語頭の *d を k や h に変えてしまっている言語があることである。小文の２番目の目的は、スラブ語の「娘」に関するこれら二つの問題についての説明を検討することである。

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

1．印 欧 語 の 「娘」

1.1

主な印欧諸語の「娘」を表す語は以下のような分布を示す。ほとんどの印欧語がグループAに属す reflex を持ち、グループBにはラテン語とその末裔が[2]、グループCにはケルト語のみ[3]がその成員となっている。これら以外にもアルバニア語の biljë、ラトビア語の meita があるが省略する。

グループA：

Skr.	duhitár-
Nsg.	duhit'ā
GAv.	dugədar-
Nsg.	dugədā
Av.	duγdar-
Nsg.	duγda
Gk.	thugatér-
Nsg.	thugátēr
Toch. A	ckācer
B	tkācer
Lyk.	kbatra
Arm.	dustr
Goth.	daúhtar
OE.	dohtor
OHG.	tohter
Lith.	dukter-
Nsg.	duktẽ
PS.	*dukter-
Nsg.	*duktī

グループB：

Lat.	fīlia
It.	figlia
	figliola
Fr.	fille
Sp.	hija
Rum.	fie (古)
	fiică (指小形)

グループC：

Ir.	ingen
NIr.	ingheann
W.	merch
Br.	merc'h

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

印欧祖語の「娘」を表す語は上記のグループAを成す語群を基礎として一般的に *dhug(h)əter-(Pokorny: 277), *dhugh(ə)ter-(Buck: 106), *dhughəter-(Watkins 1985: 15) 等のように異なる再建を施されている。例えば Bezlaj(1977-: 192) は Pokorny と、Polska Akademia Nauk(1984:157f), Senn(1966:35, 84)等は Buck と、Arumaa(1964: 81), Machek(1968: 112)等は Watkins とそれぞれ同様の再建形を用いている。

祖語の語幹の最終音節を延長した *dhughətēr- のような再建形を用いている場合もあるが、1.2 で述べるようにこれは単数主格での代償延長による延長階梯を基にしたものであって、語幹にこの形を立てるのは適当ではない。

これらの再建形の問題点は 1.3 に記すような h と schwa(ə) の扱いについてである。schwa が母音として現れているのはギリシャ語とサンスクリットなどに限られており、スラブ語を含むその他の印欧語では消失してしまう。またサンスクリットの初頭音は帯気音を失うから、これは schwa の前の子音 g も帯気音化しており、Grassmann の法則の適応を受けた結果であるとみなさざるをえないが、この予想は初頭の閉鎖音に帯気音を有するギリシャ語の形と矛盾することになる。

この矛盾を解決すべく祖語に位置に拠って母音としても子音としても機能するソナント的要素 H を想定するいわゆる喉音理論 (laryngeal theory) は *dhugHtér- のような再建形を提出するが、これによってもギリシャ語とサンスクリットの両方の形を満足に説明することはできない。この点については 1.4 に記した。

1.2

語幹の最終音節を成す接尾辞を延長し、*dhughətēr-、或いはアクセントを語幹の最終音節に明示して *dhughət'ēr- として祖語の形を再建しているのは Vondrák (1924:661), Scholz(1966:16f), Skok(1972:71), Шанский(1973:180f), Бернштейн (1974: 216) 等である。高津(1954:99)は単数主格とそれ以外の語幹を分けていて、*dhughətēr- と*dhughəter- の両方を並記している。

祖語に於ける語幹の最終音節に長母音を予想する根拠は Gk. Nsg. thugátēr や Skr. Nsg. duhit'ā (<*duhit'ār) 、 Lith. Nsg. duktẽ (<*dukt'ē) のように一連の言語の単数主格の最終音節で長母音を呈することである。しかしこの長母音は以下で見るように二次的な発達であって、*dhughətēr- のように祖語の語幹の最終

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

音節に ē を立てるのは誤り、或いは誤解を招くので避けるべきである。

上記のようにギリシャ語とサンスクリットの単数主格の最終音節は確かに長音節である。しかし、一方でギリシャ語の単数主格以外の諸形態は Asg. thugatér-a, Vsg. thúgater-φ, NVpl. thugatér-es, Apl. thugatér-as のように強階梯で現れた接尾辞 *-ter- を有する thugater- を語幹とする強い形と、 Gsg. thugatr-ós, Dsg. thugatr-í のように弱階梯の接尾辞 *-tṛ- を含んだ thugatṛ- を語幹とする弱い形とに二分される。ギリシャ語では子音間の音節主音の *ṛ は ar／ra として具現するから、一見そのどちらにも属さないように思われる Dpl. thugatrá-si(n) も弱語幹を持つ *thugat'ṛ-si(n) に由来していると解釈される。

サンスクリットについても事情は同様で Asg. duhitár-am, Lsg. duhitár-i, NVpl. duhitár-aḥ 等は強階梯 (guṇa) の語幹 duhitár- を、 Dsg. duhitr-é, Lpl. duhitṛ́-ṣu, Ipl. duhitṛ́-bhiḥ 等は弱階梯（すなわちゼロ階梯）の語幹 duhit'ṛ- を示す。[4)]

両語の強階梯 Gk. thugater-, Skr. duhitar- は単数主格に於いて語尾 *-s を用いず、 その代わりに語幹末音節を延長した。 これによって Gk. Nsg. thugatēr を得る。 一方、延長階梯 (vṛddhi) である Skr. Nsg. *duhit'ār は更に語末の r を失って duhit'ā に到達する。 この過程は、印欧祖語の有生名詞の単数主格に一般的に用いられた語尾 *-s が本来この語形にも適応されたと考えれば、 語尾 *-s が語幹末子音 r の後で脱落した際、 語幹の最終音節がいわゆる Streitberg の法則と類似した方法で代償延長されたとみなすこともできよう。[5)]

リトアニア語の e（閉じた[e]）は長い ē に起因するから、 Nsg. duktẽ も同種の代償延長を経ていると考えられる。Gsg. duktẽs (＜dukterès), Asg. dùkterį に見られる通り語幹は強弱の別なく dukter- であって、 単数主格で語尾ゼロの際に語幹末子音が脱落し、且つその前の母音が代償延長されるとも解釈できるし、或いはサンスクリットの場合と同様に単数主格の語尾 *s が脱落した際に接尾辞の音節格 e が代償延長され、その後語幹末の r が脱落したともみなし得る。[6)]

これら３つの言語の形が同じ順序で変容を受けたとすると、単数主格の形は以下の順序で形成されたことになろう。仮に語尾 *s が本来用いられたと考えておくと、まず最初に子音語幹名詞の単数主格で語尾 *s が脱落し、それに伴って直前音節の音節格が代償延長され、 次にサンスクリットとリトアニア語は語幹末の r を失っ

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

たと考えられる。

Gk. Nsg. *thugatér-s > thugátēr [7]
Skr. Nsg. *duhitár-s > *duhit'ār > duhit'ā
Lith. Nsg. *dukt'er-s > *dukt'ēr > *dukt'ē > duktẽ

上記のようにリトアニア語に於いて二次的に生じた長音節は強勢を有するとき上昇音調 circumflex (~) を獲得する。リトアニア語のアクセントについては註17に若干記したので参照されたい。

1.3

序及び 1.1 でも記した一般的な再建形である Pokorny による *dhug(h)əter-, Buck の *dhugh(ə)ter-, Watkins の *dhughəter- の問題を吟味するには、その末裔たる古今の印欧諸語の中でも特にギリシャ語とサンスクリットの形の比定を行わねばならない。これらは以下に述べるように祖語の再建に際し h と schwa の分布について相矛盾するデータを提出するのである。

	Nsg.	Asg.	Dsg.	強語幹／弱語幹
Gk.	thugátēr	thugatéra	thugatrí	thugatér-／thugat'r̥-
Skr.	duhit'ā	duhitáram	duhitré	duhitár-／duhit'r̥-

1.3.1

第１に問題になるのが気音 h の分布である。ギリシャ語は祖語の有声帯気閉鎖音の系列[8]を全て無声の帯気閉鎖音に変えたと考えられるから、祖語の語頭の子音は本来 *dh であったと思われるし、サンスクリットは祖語の *gh を h として具現するから、祖語の語中の子音 g が帯気音化していたことを想起させる。両言語の第２音節の音節格 a と i は次項で述べる schwa indogermanicum (ə) の具現と見ることができるから、祖語の形はギリシャ語を基にすると *dhugəter-、サンスクリットを基礎にすると、IE. *e, *o >Skr. a を考慮して *dughəter- となってしまい、気音 h のある音節が一致しなくなる。アヴェスタの duγəar- には ə は現れていないが、ひとまず ə を考慮から外しておくと、この形はサンスクリット

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

を基礎にした再建形を指示していると思われる。*dughter- から出発すると、「有声帯気閉鎖音＋無声無帯気閉鎖音」が「有声無帯気閉鎖音＋有声帯気閉鎖音」になると云う Bartholomae の法則の適応を受け、*dugdher- となり、更に摩擦音化によって duɣðar- に至ることができるからである。

Watkins のように第１音節にも第２音節にも気音 h の入った形 *dhughəter- から出発しようとすると、ギリシャ語とサンスクリットでは二つの気音が同一音節或いは直ちに続く音節の初頭にある場合にはその最初の気音が失われるといういわゆる Grassmann の法則が働いて *dughəter- となってしまい、サンスクリットの形は説明できるが、ギリシャ語の形には到達できない。この難点は当然ながら Buck の再建形についても同様に当てはまる。

Pokorny のように第２音節の気音を括弧の中に入れて IE. *dhug(h)əter- を想定するのはある意味では巧妙であって、気音のある *dhughəter- から Grassmann の法則を経て *dughəter->Skr. duhitar- を獲得することもできるし、気音の無い *dhugəter- から Gk. thugater- も得られる。しかしこれでは祖語に二つの形が並存し、その何れかの形を個々の言語が選択したことになってしまう。

したがって h の分布に関しては３者の再建形の何れもギリシャ語とサンスクリットの形を満足に説明できるものではない。

1.3.2

次の問題は語中の schwa についてである。本来 schwa はインド・イラン語派の i に対し Gk. e, a, o、その他の語派の *a（>CS.*o）が対応する際に祖語に仮想された音韻であって、延長階梯を基本とする母音交替の弱階梯として現れるのが一般的である。以下に代表的な例を示す：

IE.	*dhē-	: *dhə-「置く」		*stā-	: *stə- 「立つ」
Gk.	tí-thē-mi	: the-tós		hí-stē-mi	: sta-tós
				(Dor.hí-stā-mi)	
Skr.	da-dhā-mi	: hi-táḥ		ti-ṣṭhā-mi	: sthi-táḥ
		(<dhə-tós)			
Lat.	fē-cī	: fa-ctus		stā-re	: sta-tus
OCS.	ДѢ-ТИ			СТА-ТИ	: СТО-ЛТИ

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

IE. *dō- : *də-「与える」
Gk. dí-dō-mi : do-tós
Skr. da-dā-mi :(da-d-máḥ)
Lat. dō-num : da-mus
OCS. ДА-ТИ

IE. *pəter- : Gk. pater-(Nsg. patēr), Skr. pitar-(Nsg. pitā), Lat. pater の第一音節の母音も明らかに schwa を示す。この schwa は例えば Goth. fadar には明瞭に母音として現れているが、同じ接尾辞 *-ter を有する「娘」については Goth. daúhtar となっており、そこには schwa に起因するはずの要素が欠落している。

「娘」を表す語の語中に schwa の反映（以下では該当する母音に下線を付す）を持つと考えられるのは古今の印欧諸語のうち Gk. thugater-、Skr. duhitar-、後者の後の発達形である dhītar-, dhītarā- (Nsg. dhītā, dhītrā)[9]や Prasun 語の lüšt (<*düštā<*dužitā)[10]、Toch. A ckācar、B tkācer、Lyk. kbatra である。リュキア語の kbi「他の」(Cf. ミリア語 tbi)が数詞の「２」*dwi に遡るのと同様に、kbatra の前部分 kba- は *dwa-<*duwa-<*duga- に端を発していると考えられる[11]。GAv. dugədar- に現れている schwa は二次的なものであって、この形は二音節として扱われており、1.3.1 で述べたような事情で Av. duγdar- と等価となる。スラブ語も含めてその他の印欧語では「娘」の語中の schwa の痕跡は全くない。

一般にはこのような schwa の出現に関するアンバランスを、「語尾以外の第二音節にある schwa は イラン、バルト、スラブ、アルメニア、ゲルマンの各語派では消失する」(Meillet(1951:43), 高津(1954:99)等を参照）とだけ説明する。事実「娘」に関する限りこれらの語派に於いて schwa は現れていない。ではなぜ第二音節以外の位置（例えば上述の *pəter- の場合）では schwa が消失しないのかという疑問にはこの説明は解決の糸口を与えてくれない。Schwa の消失する音声環境が与えられない限りこれは満足な説明とは言えない。

Buck の立てる IE. *dhugh(ə)ter- はこのように schwa が上記のように一連の言語では出現し、その他の言語では現れないことを表現するものと思われるが、同じく難問の 1.3.1 に述べたような第２音節の h の問題はこの表記法では全く説明

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

されていない。逆に Pokorny の *dhug(h)əter- は例えばサンスクリットのような第２音節に気音のある形（*dhughəter->*dughəter->Skr. duhitar-）とギリシャ語のような気音のない形（*dhugəter->Gk. thugater- ）の両方を巧妙に表記するかのように思われるが、 ほとんどの印欧語で schwa の痕跡が現れていない事実を何等説明できない。もちろん Watkins の *dhughəter- はそのどちらも説明しない。しかし括弧を用いてその括弧内の要素がある形とない形とが並存することを表現するというのは果たして祖語の再建に許されるのであろうか。もしいくら括弧を用いても構わないのであれば気音と schwa の両方を括弧に入れた *dhug(h)(ə)ter- は Pokorny と Buck のメリットを合わせ持つことになるであろう。しかしこのような再建はいかにも姑息である。ここにこれらの再建方法の不備が露呈し、以下に述べる喉音理論に期待が移ることになるのである。

1.4

印欧祖語に母音としても子音としても機能する i u r l m n に続く第７のソナント H を立てるいわゆる喉音理論は *dhugHtér- のような再建形を提出し、 母音化した H は schwa indogermanicum に等しく、子音化した H は *gH>*gh となるとして、1.2 で概略した h と schwa の分布の問題を同時に解決しようとする。

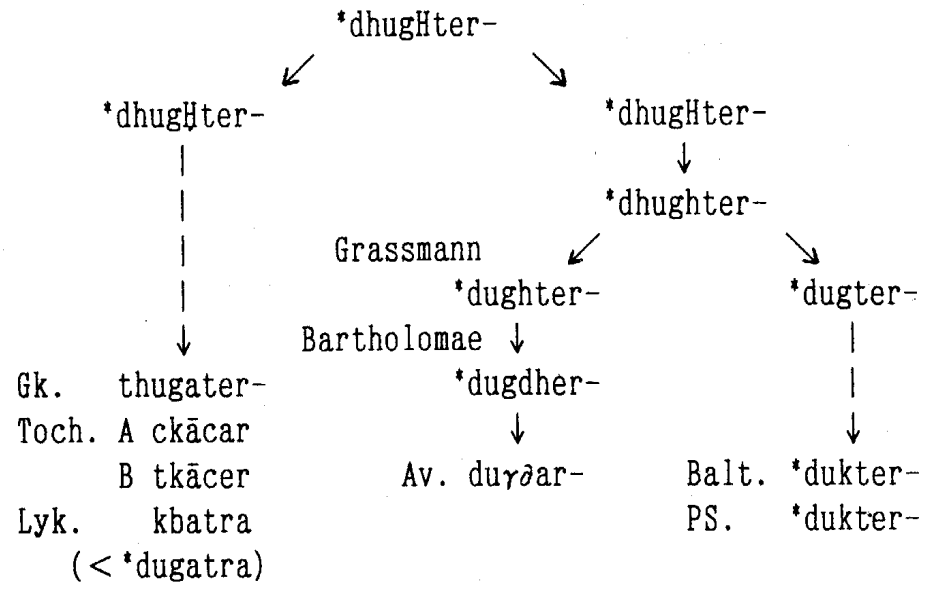
この理論の創設者は Ferdinand de Saussure である。 彼は有名な "Mémoire"に於いて、 純粋に理論的に A と O なるソナント的要素 (coefficient sonantique) を印欧祖語に仮想し、母音とこの要素との結合から長母音が生じ、母音交替によってその母音がゼロとなったとき、この要素は schwa indogermanicum に等しくなると考えた。 基本母音 e とこれらのソナント的要素のとの結合を考えると eA>ā, eO>ō であるが、これから ē を得ることはできない。 これは Saussure のミスであって、 eE>ē となる E のようなもうひとつのソナント的要素を彼は設定すべきであった。 後にこれらの E A O が一種の喉音ではないかと考えられたため、これらの仮想されたソナント的要素を用いて展開される理論が喉音理論と呼ばれることになった。ゼロ階梯となったとき E A O はギリシャ語で e a o として現れ、インド・イラン語ではこれらの区別なく i、 その他では a となる。E A O を Cuny は $ə_1$ $ə_2$ $ə_3$ と記し、 Kuryłowicz はヒッタイトを考慮して A を $ə_2$ と $ə_4$ の二つに分けている。昨今ではその子音性を強調した H_1 H_2 H_3 を用いた表記法が一般的で

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

あるのでここでも慣用に従う。Mayrhofer(1986)は h_1 h_2 h_3 と記し、 Sturtevant や Martinet は独自の記号を用いている。 これによって 1.2.2 に記した *dhē- : *dhə-, *stā-:*stə-,*dō-:*də- のような長母音を基本とする母音交替も *dheH₁-: *dhH₁-,*steH₂-:*stH₂-, *deH₃-:*dH₃- のように e とゼロとの交替に還元せられ、母音交替の図式が簡素化され、 且つ schwa のギリシャ語に於ける三つの反映が説明されることになる。o + H の場合、H + 母音の場合、及び二音節語基については省略する。

IE.*dhugHter-[12]から出発して H の母音化した *dhugH̯ter- と、 母音化していない *dhugHter- の分化を考えると、 母音化した H̯ は schwa indogermanicum に等しいのであるから前者の形は *dhugəter- に等しく、ここから Gk. thugater-、Toch. A ckācar、B tkācer、Lyk. kbatra 等 (Cf. 1.3.2) が説明される。 後者の形から *dhughter- が得られるが、 Grassmann の法則が働いて初頭音節の気音が失われ *dughter- となり、 更に Bartholomae の法則により *dugdher-となって Av. duγdar- が導かれる。 *dhughter- から *dugter->PS. 及び Lith. dukter- 等を説明するためには、 少なくともバルト語派とスラブ語派では Grassmann の法則も Bartholomae の法則も働かなかったと考えるのが最も簡単である。 両語派とも祖語の帯気音を一般に無帯気音として保存するからである。 従って、 H の母音化の条件の規定が依然として残るが、この点にひとまず目を瞑っておくと、「娘」を表すこれらの語は以下の図のように *dhugHter- から導かれることになる。



NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

IE.*dhugHter- の想定によってもサンスクリットの形はまだ満足に説明できない。Skr. duhitár- には母音化した Ḫ の現れたる i (<*ə<*Ḫ) と、子音化した H の現れたる h (<*gh<*gH) の両方が一度に現れてしまっているのである。ギリシャ語の形の説明の場合と同様に H の母音化を考えてみると *dhugḪter->*dhugəter->*dhugitar- のような形に到達してしまい、事実にそぐわない。逆に H の子音化を考えると *dhugHter->*dhughter- に Grassmann の法則が働いて *dughter- となり、更に Bartholomae の法則が適応されると *dugdher- となってしまう。従って、Skr. duhitar- の説明のためには祖語に違った再建形を立てるか、どこかの時点で contamination なり metathesis を想定するか、 或いは下に記すような接続母音の挿入を考えるかの何れかが必要になる。

*dughter- が Bartholomae の法則を受けないのであれば *duhtar- のような i がない形には達することができる。風間(1984:104)は問題の i を ə に起因するのではなくて、 Bartholomae の法則が適応される以前に接尾辞 -ter- の保全のために挿入された接続母音であるとみなしている。 つまり Skr. duhitar- の第二音節の i は schwa(<Ḫ) に起因するわけではなく、子音としての H が先行する閉鎖音を帯気音化しただけということになる。

風間は全般的に Skr. i<*ə<*Ḫ を否定しているわけではないが、 Burrow はこの推移を全く認めず、 H のサンスクリットに於ける反映は一般にゼロまたは h であるとみなしている。[13] 1.3.2 に記した IE. *dō-(=*deH₃-)「与える」のゼロ階梯の形は *də-(=*dH₃-) であって Skr. *di- が期待されるところだが、 実際には da-d-máḥ のように H₃ の実現はゼロである。 同様に *dhē-(=*dheH₁-)「置く」のゼロ階梯*dhə-(=*dhH₁-) は hi-táḥ のように hi-<*dhi- で現れることもあるが、da-dh-máḥ のように H₁ がゼロとして実現している場合もある。 この考えによると Skr. pitar- (<IE.*pH₂ter-) の H₂ はゼロとして実現していて、 第一音節の i も風間が主張するのと同様の接続母音ということになる。 一方 H が先行閉鎖音を帯気音化して実現する場合もある。 *dhugH₂-ter- も *dhugh-ter->*dugh-ter->*dugh-i-ter->duh-i-tar- と Bartholomae の法則が働く前に接続母音 i が挿入されたとみなされ、 1.3.2 にも記した*stā-(=*steH₂-)「立つ」のゼロ階梯を示す *stH₂-tós>*sth-i-táḥ の i も接続母音ということになる。[14] この理論で問題なのはゼロと h の分布に規則性が見いだせないことである。

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

Mayrhofer(1986:138)の説明は説得力に欠けると言わざるを得ない。彼は常識的に *Ḫ>*ə>Skr. i、閉鎖音に後続するとき *H は先行子音を帯気音化すると考えているが、*pH₂ter->pitar- に於いては *H₂>*ə>i であるのに、*dhugH₂ter->duhitar- では *gH₂>*ghi>hi と先行閉鎖音を帯気音化した上に母音化を起こすというアンバランスを説明するために、彼は第一音節では H は「非常に短い萌芽母音」(überkurzer Sprossvokal[15])をその前に伴って *ₒH として具現し、第二音節では同種の母音を後ろに伴って *Hₒ として具現すると考え、*ₒH >*ə>i より pitar- を、*dhugHter->*dhugHₒter->*dhughəter->*dughəter- より duhitar- を導いている。しかし、この説明の反例は簡単に見つかる。上で記した形の中でも *stH₂- に於ける H は第一音節でも Skr. sthi-táḥ のように先行する閉鎖音を帯気音化しているし、一方 *dH₃- の H は第二音節で Skr. da-d-maḥ のように先行閉鎖音を帯気音化していない。

結局のところ *dhugHter- の仮想によってサンスクリット以外の「娘」は生成されることになり、*dhug(h)əter- *dhugh(ə)ter- *dughəter- 等の想定によるよりも精度は良くなる。しかしサンスクリットの「娘」をこの想定から導き出すことは困難である。Burrow の仮定を全般的に認めることは現状では難しそうだが、「娘」に関しては彼の主張する接続母音による説明が無難であろうかと思う。

2. スラブ語の「娘」

2.1

Трубачев 等に従ってスラブ語の「娘」の分布を示す。参考のためリトアニア語の形も並記しておく。スラブ語に仮想される最古の形は PS.*dukter- (Nsg.*duktī) と r 語幹を保持していたと考えられるが、その reflex たる後のスラブ諸語は r 語幹を保持している場合もあれば、生産的な a 語幹に変えてしまった場合もある。[16] 古いr 語幹を保持する形は左側の欄に単数主格と単数生格を、a 語幹化してしまったものは単数主格のみ右側に記す。

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

	r 語幹		a 語幹
Lith.	duktẽ	dukteĩs[17]	dukrà[18]
		<dukterès	
PS.	*duktī	*duktere	
CS.	*dъkti	*dъktere	
OCS.	dъšti	dъštere	
Bolg.			дъщеря́[19]
Mac.			ќерка
SCr.	kćî	kćȅri	ćérka[20]
Sln.	hčí	hčére[21]	hčérka
OCz.	dci	dceře	
Cz.	tci	tceře	dcera[22]
Slk.			dcéra
Pol.			córa
			córka
OR.	дъчи	дъчери	дъчька
R.	дочь	до́чери	до́чка
Uk.	доч	до́чері	дочка́[23]
Br.			дачка́

CS. *kt はロシア語、ウクライナ語、白ロシア語が属する東スラブ語では č (ч) [tʃ'] 、 チェコ語、ポーランド語、スロバキア語、ソルブ語などが属する西スラブ語では c [ts] 、 バルカン半島の南スラブ語では東から順番に言うと古代教会スラブ語とブルガリア語では št [ʃt] 、マケドニア語では硬口蓋閉鎖音 ќ [c] 、セルビア・クロアチア語では ć(ћ) [tʃʲ] (むしろ IPA では [tɕ] によって表記するほうがよかろう) 、スロベニア語では č [tʃ] となる。この変化に従って CS.*dъkter- から規則的に OR. dъčer-(=дъчер-, Cf. R. дочер-) 、OCz. dcer- (Cz. dcer-、但し d は黙字で発音は cer- すなわち [tser]) 、OCS. dъšter-(Дъштєр-, дъштєрь-) 等が生ずることになる。*kt のスラブ語に於ける発達、及びその問題点については例えば Abernathy(1974) を参照されたい。

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

上に見るように、 a 語幹化した形は er を保存する場合も、 失う場合もあり、更に接尾辞を加える場合も加えない場合もある。

CS. *dъkter- からスラブ諸語が更に分岐する。 問題となるのは単数主格に於いて CS. *dъkti, OR. dъči (=дъчи, Cf. R.дочь), OCz. dci, OCS. dъšti のように語幹末の要素 -er- が脱落して語尾が -i になってしまっていることと、 SCr. Nsg. kćî(кћи), Gsg. kćëri(кћери) や Slov. Nsg. hči, Gsg. hčere のように語頭の *d を k や h に変えてしまっている言語があることである。

2.2

単数主格 CS. *dъkti の問題を検討する。

CS.*dъkter-< PS.*dukter- は 1.2 に記した Skr. duhit'ā (語幹 duhitár-), Lith. duktẽ (語幹 dukter-) と同様の運命を辿り、 単数主格で語尾ゼロの際に語幹末の r を失い、結果的に CS. Nsg. *dъkti <PS. *duktī を得る。 CS. *dъkti が Gk. thugátēr, Skr. duhit'ā, Lith. duktẽ と同じ順序に同様の変化を受けて構成されたと仮定するならば、 祖語の段階で単数主格の語尾 *-s を失った際に直前音節が代償延長されたと考えられる。 すなわち IE. *dhugHters >*dhugHtēr> *dugtēr>PS. *duktēr (但し非常に早期) となり、 その後語末の r を失ったことになる。 この語の単数主格に於ける最終音節の延長が祖語に遡らない現象であって、 個々の印欧語で別個に生じた変化であるとみなすことも可能かも知れないが、このような仮定は祖語の段階で単数主格に延長階梯を考える一般に受け入れられた見解とは矛盾する。

語末の r の脱落がいつ生じたかもまた難問であり、 ギリシャ語の thugatēr が語末に r を保存していることが何らかの innovation でない限りは、 r の脱落が印欧祖語の統一が保たれているの時点で起こったのではなく、印欧祖語の統一が崩れたあとに Skr. duhit'ā<duhit'ār のような脱落が生じたと考えるのが合理的であるとしか言えない。ここではこの脱落がスラブ祖語の非常に早い段階、或いはバルト・スラブの統一体を考えるのであればその祖語の段階で生じたと仮定しておく。

これにより少なくとも非常に早い時期のスラブ祖語に Nsg.*duktē<*duktēr を想定する必要があるが、この語に於いてはその後の発達形として PS. *duktī>CS. *dъkti を考えねばならず、一般的に見受けられる PS. *ē>CS. *ě (>OCS. ѣ=ě)

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

の推移と矛盾する。*ē>*ī の異常な推移を示すのは CS. *dъkti の他に CS.*mati (<PS. *mātī<*mātē<*mātēr<IE.*māters. Cf. Gk. mētēr, Skr. mātā<mātār, Lith.móte<*mātē) のみである。

*duktē>*duktī, *mātē>*mātī のいわばカタストロフィーの説明は相当困難であり、例えば Meillet(1951:119) は以下で述べる第1の説明法を紹介してはいるものの、その真偽に関しては懐疑的で、同書の p. 343 では原因不明としている。この現象には、かつて二種類の説明が試みられた。

2.2.1

その一つは恐らく Pedersen の発案によるもので、PS.*ē>CS.*ě/*i の差異はバルト・スラブ語に仮想される長音節のいわゆる intonation の違いに帰される。これによると acute の ē(é) は *ě に、circumflex の ē(ẽ) は *i にそれぞれ転じたことになる。

本来的長母音の ē (<*eH$_1$) は CS. ě となり、その intonation は acute である。[24] 例えば IE. *wēr-(Pokorny. Cf. Lat. vērus) の接尾辞をつけた形 *wērā- に起因する CS. *věra(>OCS. вѣра) の ě は SCr. vjȅra[25] から見ても acute であるし、現代ロシア語の вéра が語幹に固定したアクセントを持つ事実も、acute 音節が語尾へのアクセント移動を許さないことを考慮すると、その第一音節の e (<*ě) が acute 起源であることを裏付ける。一方、本来的 *ē 以外から発達した ě は circumflex となる。これには e の二次的延長による場合と、*oi/*ai に起因する場合とがある。前者の例としては PS. *bergos>CS. *bergъ が南スラブ語では閉音節排除のためメタテーゼを行った際に語根母音を二次的に延長して構成された OCS. брѣгъ をあげておく。この語の語根母音は SCr. brêg(brȉjeg) から見て circumflex である。後者の例には PS. *kvoitos>CS. *květъ をあげておく。この語では西スラブ語以外で k が v の介在にも関わらず第2パラタリゼーションを受けて c となるが、語根の ě は SCr. cvêt (cvȉjet) から見て circumflex である。

*duktē と *mātē の第二音節も二次的延長による長母音であるから circumflex が期待されるが、この期待は正しい。リトアニア語では語末の acute 音節は規則的に短縮される (Leskien の法則と呼ばれる) のだが、Lith. duktẽ(<*dukt'ē)

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

と móte(<*m'ātē) の語末音節は短縮化を受けていない。加えて前者の最終音節は強勢を受けて (˜) と circumflex であることが明示されている。したがって両語の最終音節が circumflex に属すことが確かめられる。[26)]

以上のように、本来的長母音の ē が acute の ě となり、何らかの二次的延長によって生じた ē が circumflex となることは確認されるが、後者の ē もほとんどの場合に CS. *ě となっており、Pedersen の予期する ī は唯一 CS.*mati と *dъkti に見られるにすぎない。したがって acute ē>ě／circumflex ē>ī>i の仮定は誤りと言わねばならない。

2.2.2

もう一つの説明法は、例えば Vaillant(1950:211f.) や Shevelov(1964:164)が記す CS.*oldьji (>OCS. **лдии**) のような単数主格が PS.*ī>CS.*i に終わる名詞[27)]による形態論的均一化を考えるものである。

例えば現代ロシア語にはこのタイプの変化をする名詞は一語も残っておらず、全てが **богиня судья** のように a 語幹化している。このタイプの名詞の a 語幹化は既に古代教会スラブ語の時点に於いて観察され、**богъıни сѫдии** のように単数主格だけは辛うじて i に終わっているが、それ以外の形態はいわゆる a 語幹の軟変化に等しくなっている。

この説明の難点は、もし PS. *mātē *duktē が上記のような PS. *ī>CS. *i に終わる名詞との形態論的均一化によって CS. *mati *dъkti となったのであれば、他の名詞が a 語幹化を被る中で、なぜこの２語だけが i に終わる古形を保持したのかという疑問に答えられないことである。両語が基本語彙であるが故に使用頻度が高く、CS. *mati dъkti を保持してアノマリーとして今日まで残ったという論法はここでは無意味である。なぜなら同じ論法によると PS. *mātē *duktē はスラブ語の名詞としては異常な形であるが、基本語彙であるが故に CS. *matě *dъktě のままでその後も保持されてもよさそうなものだからである。

2.2.3

筆者自身の試案は CS. *mati(*mater-), *dukti(*dukter-) と *kamy(*kamen-) のような n 語幹名詞との対比から始まる。

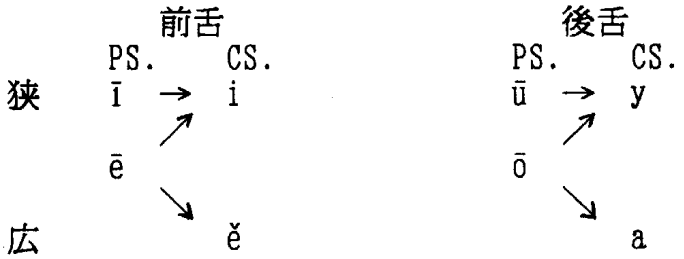
NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

CS. *kamy については単数主格とそれ以外に母音交替した別の語幹を設定する必要があり、 前者は PS.*kāmon- 後者は *kāmen- であって、この事情はリトアニア語に於いても同様 (Nsg. akmuõ<*akm'ō<*akmon-s／Gsg. akmeñs<akmen-ès) [28] なのだが、 リトアニア語の場合は単数主格の語尾 *-s が脱落した際に、直前音節格が代償延長され、 その後語末の n が脱落し、ō>uo と規則的に発達したと考えられる。 一方、 スラブ語の CS. Nsg.*kamy は *kāmon-s から同様に語尾 *-s を失い、代償延長によって *kāmōn、 更に語末の n を失って *kāmō に到達したあとに *kāmū>CS.*kamy なる更なる変化を受けたとみなさざるをえない。 PS. *ō は普通は CS.*a に対応するはずだが、 ここでは異常な音変化 *ō>*ū (>CS.*y) を想定せねばならず、 この過程は問題の *duktē>*duktī>CS. *dъkti に於ける *ē >*ī (>CS.*i) と口の開きが狭くなったという意味で酷似している。

PS. *duktēr > *duktē > *duktī > CS. *dъkti OCS. дъщи
PS. *kāmōn > *kāmō > *kāmū > CS. *kamy OCS. камы

通常の長母音 PS.*ē *ō はそれぞれ口の開きが大きくなって CS.*ě *a になるわけで、問題になっている PS. *ē *ō>CS. *i *y では口の開きが逆に狭くなっている。スラブ祖語の長母音とそれらの共通スラブ語に於ける発達形を表にしてみると以下のように明かなシンメトリーと PS. *ē *ō の分岐が観察される。



上記のように印欧祖語の段階で単数主格の語尾 *-s が脱落し、 その際に直前音節の音節格 e o が代償延長されて ē ō になっていたものと考えておくと、非常に早期のスラブ祖語の期待される形は *duktēr 及び *kāmōn である。 ここから語末のソナントの単なる脱落を考えると *duktē>CS. *dъktě 及び *kāmō>CS. *kama が期待され、事実に合わなくなる。 そこで筆者は *duktēr 及び *kāmōn の語末のソナント r n が脱落した際に、 直前音節格が普通の ē ō とは質或いは量の点で

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

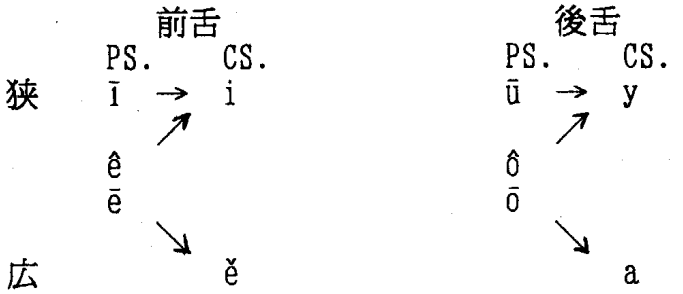
異なる長母音になったものと仮定したいと思う。これを ê ô で記すことにする。これによるとソナント脱落後のスラブ祖語の形は ê ô を持つ *duktê 及び *kāmô となる。

PS. *ê *ô の音価を推定するのは難しいが、通常の *ē *ō と質の点で異なったとすれば調音が狭くなったものと考えられ、その場合 *ê *ô はスラブ祖語の後の段階で *ī *ū と混同されたことになる。このような狭母音化を想定するのが常識的であろう。しかし、逆に量の点で異なったともまた考えられ、後続ソナントが失われた際に、長母音 *ē *ō が更に代償延長され、3倍長の *ê *ô となったと仮定することもできる。確かにこれは突拍子もない考えであるが、例えばエストニア語には量に短／長／超長の三つの区別があり、全く不可能な仮定とは言いきれない。この仮定に従うと、3モーラの *ê *ô は安定せず、通常の2モーラの長母音に転じるが、その際に代償的に口の開きが狭まって PS. *ī *ū に一致したと説明される。どちらの音価を予想するにしても PS. *ê *ô は *ī *ū に転じ、更に CS. *i *y に至ることになる。

リトアニア語については語末のソナントが脱落した際にこのような通常と異なる長母音の一時的存在を考える必要はない。この仮定によってリトアニア語を加えて CS. *dъkti, *kamy の生成過程を書き換えると以下のようになる。

PS.	*duktēr	>	*duktê	> *duktī	> CS.	*dъkti
Balt	*duktēr	>	*duktē		> Lith.	duktẽ
PS.	*kāmōn	>	*kāmô	> *kāmū	> CS.	*kamy
Balt	*akmōn	>	*akmō		> Lith.	akmuõ

*ê *ô を加えたスラブ祖語の長母音とそれらの共通スラブ語に於ける発達形を表にしてみると以下のようになり、PS.*ē>CS.*ě／*i, PS.*ō>CS.*a／*y のような分岐を考える必要がなくなる。



NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

スラブ祖語の長母音 *ē *ō に後続する子音が失われたときに特殊な長母音である *ê *ô が生じ、後に *ī *ū と混同されたという仮定によって、例えば o 語幹男性名詞の語尾 Apl.*-ons> PS.*-ōn>*-ô>*-ū>CS.*-y は説明可能である。一方、特に語尾に関しては説明に窮する場合も多々あり、これをもって解決と言うにはほど遠い。

2.3

CS. *dъkti より ъ 及び kt が各々のスラブ語で異なる変化をした結果として例えば OCS. дъшти, OR. дъчи, OCz. dci 等を得るが、セルビア・クロアチア語とスロベニア語の kćî と hči に於いては ъ が母音性を失って後続の ć č (<CS.*kt) と初頭の d が直接隣接した結果、d は逆行同化によって無声化を受けたのみならず、セルビア・クロアチア語に於いては k に、スロベニア語に於いては h に更に変化している。小文を終えるにあたって両者の成立過程を検討してみたい。

初めにセルビア・クロアチア語の形について考えてみる。一般的には(d>)t>k は弱母音 ъ ь が母音性を失い、後続子音との子音連続を構成したことに起因する異化であるとだけ説明される。すなわち CS. *dъkter- は *kt が SCr. ć に転じたことにより SCr. dъćer- となり、弱母音が失われて *dćer-、逆行同化によって *tćer-、ć の前で t が k に異化して kcér- に至ることになる。ただしこの異化の生じる条件の規定は一般になされていない。例えば Nahtigal(1963:157) の挙げている他の例のうち d>t>k を含むものには Slov. dékla (<*dětьla) 「女中」や Pol. większy (<*vęćьš-<*vętьš- Cf. Cz. větší) 「より大きな」の２例があるが、これらと SCr. kćî (<dъćî) だけから条件を引き出そうとすると、「弱母音の喪失によって歯茎音あるいは前部硬口蓋音が直接後続するようになった場合に、先行する歯茎閉鎖音は軟口蓋閉鎖音に異化される」ということになる。しかし例えば Pol. ojca (<*otьca) に於いては同じような条件下で t>j なる全く異なる異化が生じている。

スロベニア語の hči/hčer- の説明のためには、CS. *kt>Slov. č を考慮し、セルビア・クロアチア語に於けるのと同様の先行子音の異化を経た *kči／*kčer- から更に k>h[29]の摩擦音化を期待しなければならない。この異化は上記のセルビア・クロアチア語の *tć>kć よりもはるかに一般的である。Nahtigal(1963:156) が

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

閉鎖音あるいは破擦音に後続された場合のロシア語とスロベニア語に於ける軟口蓋閉鎖音の摩擦音化をかなり詳しく記している。1) [kk]>[xk]: R. мягко, легко; Slov. me*h*ko, la*h*ko; 2) [gg]>[γg]: R. к голове; Slov. *h* glavi; 3) [kt]>[xt]: R. локтя, ногтя; Slov. dve la*h*ti, no*h*ta; 4) [gd]>[γd]: R. где; 5) [kč]>[hč]: R. к чему; Slov. ni*h*če. 問題の *kči/*kčer->Slov. hči/hčer- はその５番目のケースに当たる。

セルビア・クロアチア語の方言に指摘されている šći/šćer- なる形は、セルビア・クロアチア標準語の kći/kćer- が上記のスロベニア語に於けるような摩擦音化を受けて *hći/*hćer- となり、更に第１パラタリゼーションによって h>š の変化を受けた形であると解される。

以上より SCr. kćer-, dial. šćer-, Slov. hčer- の形成過程を記すと、下のようになる：

CS.*dъkter->*dъćer->*dćer->*tćer->SCr. kćer-> *hćer->dial. šćer-
>*dъčer->*dčer->*tčer-> *kčer->Slov. hčer

おわりに

小文執筆に際し、文献入手に関して京都大学の山口巌教授、神戸市外国語大学の井上幸和教授のお手を煩わせた。親和女子大学の松村恒教授にはサンスクリットについての筆者の幼稚な疑問にお答え戴いた。本学の高橋明助教授には松村先生への仲介の労をお取り戴いた。記してこれらの方々に深甚なる謝意を表する次第である。

1992年2月13日

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

(註)

1)ここで用いた「スラブ祖語」(PS) と「共通スラブ語」(CS) は本来それぞれドイツ語の das Urslavische とフランス語の le slave commun の翻訳であり、英語及びロシア語に前者は Proto-Slavic, праславянский язык、後者は Common Slavic, общеславянский язык と訳される。かつては両者とも分岐以前のスラブ語全般を表すために用いられ、両者の意味上の差異はなかったのだが、昨今では印欧祖語から分岐したスラブ語派の最初の段階とそれが更にスラブ諸語へと分岐する直前の段階とを区別する必要性が増し、前者を早期スラブ祖語 (ealy Proto-Slavic, раннепраславянский, Frühurslavisch, etc.)、後者を後期共通スラブ語 (late Common Slavic, позднеобщеславянский, Späturslavisch, etc.) と称する傾向が見られる。このあたりの事情については Бирнбаум(1966: 153f; 1987: 17-20) に詳しい。

2)ラテン語の fīlia は「息子」の意の fīlius と同様に「吸う」(Lat. fēlāre) を意味する印欧語の語根 *dhēi- に遡ると一般的に考えられている。Buck(105f), Watkins(1985:13) 等を参照。しかし IE.*bhū- から出発する説もある。イタリック語派の中で唯一 IE.*dhug(h)ǝter-等の反映と考えられるのはオスク語の futír であるが、この比定にも異論があるようである。

3)これら二つのケルト語の形のうち、いわゆる Goidelic、例えば Ir. ingen 等は *eni-genā「(家庭の) 中に生まれた (女)」を原意とし、一方 Brythonic である W. merch, Br. merc'h は Lith. mergà と同源で「少女」を原意とする。

4)高津(1954: 221) も記しているように、接尾辞 *-ter-／*-tṛ- 以下のみ示すと Skr. G-Absg. -tuḥ (<-tur<*-tṛ-s(?)), Gpl. -tṝ-ṇām, Apl. -tṝ-ḥ (男性名詞、例えば Nsg. pit'ā (語幹は pitár-／pitṛ-<IE.*pǝter-／*pǝtṛ-) では Apl. pi-t'ṝ-n) に出現する接尾辞の形 -tur- と -tṝ- の母音交替の関係の解明は難問である。両者とも新たな形であって、特に後者には a 語幹からの analogy で延長階梯となっているらしい。

5)何らかの要素の脱落によるその直前の音節の二次的延長は種々の言語に於いて広く見受けられる。有名な例を挙げると、印欧祖語の直説法能動相の thematic な3人称複数の語尾 *-onti はギリシャ語では *-onsi を経て、n が脱落し、直前音節を代償延長して -ōsi となった。-ōsi は古典ギリシャ文章語では -ousi となる。

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

スラブ語でも、接尾辞 *s を用いて構成される古い sigmatic aorist にその典型的な例を見出すことができる。２・３人称単数ではこの接尾辞を用いる形態はないので対比のため 3.sg. を並記する。

	PS	①	②	③	CS		OCS	
1.sg.	*ved-s-on	> *vedsъ	> *vēsъ	> *věsъ	=	кѣсъ	ѵѣ̀ѯ
3.sg.	*ved- -e	> *vede	= *vede	= *vede	=	кѣдѣ	ѵѣ́ѣ
1.sg.	*kit-s-on	> *čitsъ	> *čīsъ	> *čisъ	=	чисъ	ѳѮ̀ѯ
3.sg.	*kit- -e	> *čite	= *čite	> *čьte	=	чьтѣ	ѳ҃т҃ѣ
1.sg.	*rek-s-on	> *rekxъ	> *rēxъ	> *rěxъ	=	рѣхъ	bѣ̀b҃ѯ
2.pl.	*rek-s-te	> *rekste	> *rēste	> *rěste	=	рѣстѣ	bѣ̀ѯ҃ѣ
3.sg.	*rek- -e	> *reče	= *reče	= *reče	=	рѣчѣ	bѣ́ѣ

①一人称単数の語尾が -ъ となった推移。問題も多いが *i *u *r *k の後で且つ子音以外の前で *s が x に転じた推移も並記した。第１パラタリゼーションが生じた時期も確定が難しいが簡略のため一応ここに含めた。

②語幹末の閉鎖音がアオリストのマーカーである *-s- の前で脱落し、直前の音節が代償延長された推移。

③はスラブ語が音節の長短の対立を失い、それまでの量的差異を質によって表すようになった変化である。これによって PS.*e, *ē>CS.*e, *ě; PS.*i, *ī > CS.*ь, *i のごとく母音の質が変化した。

6) *seseñ- のような r 語幹名詞の一部と *akmeñ- のような n 語幹名詞も単数主格で語尾ゼロであって、同様に語幹末の r あるいは n を失う。その際、語幹末音節の母音が*o に交替して、同様に代償延長によって *ō>uo となる。単数主格がもともと -s に終わっていたとすると Nsg. sesuõ<*ses'ō<*ses'ōr<*ses'or-s, Gsg. seseñs<seserès<*seser-'es ; Nsg. akmuõ<*akm'ō<*akm'ōn<*akm'on-s, Gsg. akmeñs<akmenès<*akmen-'es のように単数主格の -s が脱落した際に最終音節が代償延長されたとみなすのがサンスクリットとギリシャ語の形に照らして合理的である。これらの語幹に於ける e と o の交替の条件付けは困難であって、現に dukter- は単数主格に於いて *duktor-s>*duktōr>*duktō>*duktuõ のような発達を示さない。従ってこれらの語に対しては *sesor-/*seser-,*akmon-/*akmen- のように単数主格とそれ以外の語幹を別に設定せざるを得ない。前者は下記のように語根の唇音 w の分布に問題があるけれども普通 IE *swesor- と再建されるから、

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

リトアニア語でも接尾辞の母音は本来 o であって、 不明の条件のもとに斜格に於いて e に交替したのかも知れない。

一般に IE. *swesor- と再建されるが、w を示すのはインド (Skr. svásar-)、ゲルマン (Goth. swistar, OHG. swester, OE. sweostor)、ケルト (Ir.siur, W. chwaer) の各語派であって、その他の語派では Lat. soror, Lith. sesuõ (Gsg. seseřs), OCS. sestra のように w の要素が欠如している。ゲルマン語とスラブ語の最終音節には t が現れているが、これは接尾辞 *-sor- のゼロ階梯 *-sr- にわたりが加わったものである。同様の現象は各国語に於いて実に頻繁に見られ、例えばフランス語の être や conaîttre の t も本来このようなわたり音に起因する。être の元々の語幹は未来形に見られる /sr/(正書法上 ser-) であって、r が元々舌先の trill であったためわたりの t を獲得し、/str/ となり、 語頭で e を加えて /estr/、更に s が脱落して /etr/、正書法上 être に到達する。 conaître についても同様で nous connaiss-ons, vous connaiss-ez に見られるように現在語幹は /conɛs-/(connaiss-) であって、不定法は /conɛsr/>/conɛstr/>/conɛtr/=connaître と生成される。

7)アクセントは本来接尾辞 *-ter-／*-tr̥- にあったものと思われる。 ギリシャ語では Nsg. thugátēr, Vsg. thúgater 以外の全ての強語幹の形は接尾辞にアクセントを有する thugatér- を示し、弱語幹の形も予想される音節の切れ目を (/) で表すと Gsg.thu/ga/trós Dsg.thu/ga/trí Dpl.thu/ga/trá/si(n)<*thu/ga/tr̥/si(n) となり、-tr̥- を含む音節がアクセントを獲得しているとみなし得る。Nsg.と Vsg. でのアクセント後退の原因は不明だが、後者については接尾辞 -ter-/-tr̥- を持つ名詞一般に３音節の法則が許す限りアクセント後退を行う。サンスクリットについても同様の現象が観察され、 それに合わないのは Vsg. dúhitaḥ<dúhitar と、註４に記した類推によって接尾辞の音節格を延長したと考えられる Gpl.duhitr̥ṇ'ām のみであって、やはり原則的には接尾辞にアクセントがあったと思われる。両語に於いて Gk. thúgater, Skr. dúhitaḥ のように単数呼格で強勢位置が初頭音節に移動しているのも単なる偶然とは思えないが、その詳細は筆者には分からない。

8)印欧祖語に無声帯気閉鎖音（例えば ph ）の系列が存在したかどうかは１９世紀以来議論の分かれるところであって、戦後では Roman Jakobson が第８回国際言語学会でタイポロジーの観点から印欧祖語に於ける閉鎖音の４系列（無声 p、有声b、無声帯気 ph、有声帯気 bh）の存在を主張したことが知られている。 Jakobson の

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

論法の要旨は、ギリシャ語のように p b ph の３系列を持つ言語や、サンスクリットのように p b ph bh の４系列を持つ言語は存在するが、p b bh の３系列を持つ言語はありえないというものであるが、既に系統樹説で有名な August Schleicher が正しく指摘するように、実はサンスクリットでも無声帯気音 ph の系列は sp からの二次的発達であって、本来サンスクリットは閉鎖音に p b bh の３系列を持っていたと考えられる。ギリシャ語はこの３系列を p b ph に変えて保存している。たとえ祖語に p b bh 以外に ph の系列を想定しても高津（1954:61） が指摘するようにその該当例は極端に少ない。以上より Schleicher 以来の p b bh の３系列説が妥当であると思われる。このあたりの事情の概略については風間(1978:143ff) 等を参照。

9)Mayrhofer(1963:104f.)参照。

10)風間(1984:101), Mayrhofer(1986:137) 等を参照。

11) Benveniste(1973:206f.)による。 Benveniste はここで出てくるリュキア語の形を cbi "two", Asg. cbatru のように c を用いて転写しているが、 小文では大城・吉田(1990) に従って k を用いておく。 Lyk. kb< *dw を示すと思われる他の例に関しては同書の pp. 221f.を参照のこと。

12)ギリシャ語では thugater- のように語中音節に a を示すから、 より正確には *dhugH₂ter- である。

13)彼は1949年に *Transactions of the Philological Society* なる雑誌に於いてこの一見常識はずれの見解を初めて公にし、 その後 *The Sanskrit Language* に於いてもこの立場を崩していないらしい。但し筆者自身は現時点に於いて両者とも未見であって、ここに記すのは Martinet(1956:304-7)による。

14)不可解なことに、正常階梯の *steH₂- もサンスクリットでは tí-ṣṭhā-mi のように先行子音が帯気音化してしまう。

15)支えの母音 (prop vowel) の意味であろうと思われる。 このような想定を風間は schwa secundum の復活であるとして批判している。「萌芽母音」という訳語は小学館の『独和大辞典』による。

16) r 語幹に限らず、子音語幹名詞は、一般的により生産的な母音語幹に変わって

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

行く。例えば現代ロシア語に於いて r 語幹を今日まで保持しているのは дочь（語幹 дочер-）、мать（語幹 матер-）の２語しかない。この事情は他の現代スラブ諸語についても同様だが、チェコ語の Nsg. net'(～neteř), Gsg. neteře「姪」の扱いは少々難しい。 Бернштейн(1974:217)はこれも r 語幹の CS. Nsg. *neti, Gsg. *netere に遡ると記しているが、この独断的見解を支持するスラブ語内のデータはないようである。Vaillant(1958:258)はこれらを CS.*netii「甥」と CS.*nestera「姪」との混交によって１９世紀に新しく作られた形だと考えている。これらはそれぞれ更に PS. *nept-ijo-, *nept-tera に遡り、IE. *nepot- のゼロ階梯の形に端を発しているとみなし得る。風間(1984:231f.)は「姪」の形を *nept(t)era なる形から出発して *pt>st は考えにくいから *sestra からの類推が働いたと考えている。しかし上記のように PS. *neptijo-, *nepttera を想定すれば、この位置で p は脱落し、*netijo-, *nettera となり、更に *tt>st によって *netijo-, *nestera すなわち CS. Nsg. *netьjь(=*netii), *nestera に規則的に到達できる。Pokorny(764)や Watkins(1985:44)の記す IE. *nepōt- は延長階梯を基礎にしたものであって、上記の観点からは *nepot- の方が基礎の形としては better である。この点については風間(1984:115ff.)等を参照。

17)リトアニア語の強勢音節には長短の対立があり、長音節は更に下降調 acute(´)と上昇調 circumflex (~) の区別が為され、短音節のアクセントは grave (`)で表記される。ただし acute, circumflex の差異の認知は筆者には困難である。acute は印欧祖語の本来的長母音或いは音節主音的長ソナントに、 circumflex は二重母音或いは二次的に生じた長音節にそれぞれ由来するのであるが、そのことを明らかにしたのは Saussure の "A propos de l'accentuation lituanienne"(1894) である。彼は有名な "Memoire"(1879) に於いて今で言う laryngeal の存在を既に予測していたが、 彼が明らかにした acute の起源は結局のところ母音或いは音節主音的ソナントに彼自身が印欧祖語に於ける存在を予測していた laryngeal が後続した場合に他ならない。Saussure はその後も "Accentuation lituanienne"(1896)を発表し、非 acute 音節にあるアクセントは後続する acute 音節に移動するといういわゆる Saussure の法則に到達している。この法則は今ではスラブ語には効力を持たないとみなされているが、かつては Фортунатов の法則とも呼ばれ、バルト及びスラブの両者に共通に働いたと考えられていた。このような画期的・超時代的な見解を次々と発表した Saussure の頭脳には驚嘆せざるを得ない。彼の業績の真価

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

は丸山圭三郎氏が盛んに紹介するところとは全く違ったところにある。

18)*duktrá に起因する。語末の acute 音節が短縮化されて grave となるのはいわゆる Leskien の法則として有名である。

19)方言には дъмтер'á, дъ́мтер'ъ, че́рка, ке́ра の形もあるらしい。

20)方言に šćî, šćéri(Karadžić), ćî, ćȅri, dȁšta の形もある。一般にセルビア・クロアチア標準語の強勢音節は長短の対立と音調との対立とを合わせ持ち、上昇長(´)、上昇短(`)、下降長(^)、下降短(˜)と表記されることになっている。実際にはセルビア・クロアチア語は Trubetzkoy の言うところのモーラ言語であって、長音節は２モーラと解釈され、日本語と同様に個々のモーラは高音域或いは低音域に属す。強勢モーラは高音域に属し、上昇調は強勢モーラに続くモーラが高音域に属すことを示し、逆に下降調は強勢モーラに続くモーラが低音域に属すことを示すとみなしてよい。仮に任意の音節を x、任意のモーラを y、強勢位置をモーラ直前の(')、高音域と低音域をそれぞれ上線と下線で記すとすると、上記の４つのアクセントは x́='y̅y̅, x̀x='y̅y, x̂='y̲y̅, x̃x='y̲y と表示し直すことができる。この解釈が正しいことは、e 方言の é と ê が ije 方言ではそれぞれ ìje (='ı̅je̅), ȉje (='ı̲je̅) となることによっても確認される。

歴史的に言うと、セルビア・クロアチア語では１５世紀頃規則的な強勢位置の後退が起こり、新たに強勢を獲得した音節は上昇音調を得、一方強勢位置の後退が不可能であった本来初頭音節に強勢を持つ語は強勢位置後退の代替現象として下降音調を獲得したのである。これを基にすると上記の４つのアクセントは x́x=x̄'x, x̀x=x'x, x̂='x̄, x̃='x と表示し直すこともでき、音調変動を音節の長短と古い強勢位置のみで表現することができるようになる。この表記法のプライオリティーとこれを用いたメリットなどに関しては拙稿「セルボ・クロアチア語のアクセント」(大阪外国語大学学報 76-1,2, 1988, pp. 51-80) を参照。

21)ここでは現代スロベニア語の表記法に従った。現代の表記法では強勢音節は原則として(´)で表示され、強勢のある広い e と o を示す場合にのみ(^)が用いられる。逆に é ó は強勢のある狭母音を表す。歴史的には ê ô は最終音節からのアクセント後退によって新たに強勢を獲得した音節格である：e.g. sêstra, nôga. Cf. R. сестра́, нога́. 強勢音節は原則として長めに発音されるが、最終音節にあっては短縮化されて(`)と表記される：e.g. Gsg. bráta vs. Nsg. brȁt. 従って

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

時に主張されるスロベニア語の長短の対立は音韻論的には無価値である。現行の表記法にはこれ以外にもかなりの不備があり、例えば CS. *ъ, *ь に起因する中舌母音 [ə] も広い [ɛ] も e 或いはアクセントがあれば è で記されてしまう。

蛇足だが、一般にはスロベニア語にもセルビア・クロアチア語やリトアニア語と同様に強制音節に弁別的音調変動があると考えられているが、音調変動が記載されているのは一世紀も前に出版された Pleteršnik のスロベニア語＝ドイツ語辞典と1970年から出始めた５巻本の大辞典（最終巻は筆者未入手）だけであって、(´)(^)をそれぞれ上昇、下降音調として同語は hčî, hčêre （ę は狭い [e] を表す）と記載されている。しかしこれら両辞典以外にスロベニア語の音調を記した資料は皆無であり、厳密な音響音声学的研究に基づいているわけではないが、筆者の聴覚印象では文末以外の位置でのセルビア・クロアチア語の多音節語に於けるような明白な音調変動は感じられず、かつて筆者が予備的に行ったインフォーマント調査ではミニマルペアの存在さえ怪しかった。したがって私見では現代スロベニア語の強制音節に於ける弁別的音調変動の存在自体が既に疑わしい。

22)方言には「少女」の意で cérča, cérka の形もあるらしい。 尚 tci tceře は「息子の嫁」の意の古い語である。

23)доч は今のウクライナ語では廃語であって、一般には指小形である дочка が用いられるが、Бернштейн によるとネイティブスピーカーにこの語は既に指小形とは感じられていないらしい。

24)上記註17に記したリトアニア語の長音節に於ける acute と circumflex の音調対立はスラブ語に於いても同様に存在し、この点に於ける両者の対応関係は明白である。これらの音調を伝統的に intonation と呼んでいる。

25)初頭の acute 音節はセルビア・クロアチア語では、短い下降調アクセント(˜)として具現される。 逆に circumflex 音節は原則として一音節語では長い下降調(^) に、 多音節語では長い上昇調 (´) になる。なお、念のため付け加えると、以下の例の中でのエ方言の ê(brêg, cvêt) はイィエ方言では ije(brijeg, cvijet) と記されるが、後者は acute の反映ではない。

26)かつては強勢を持つ持たないに関わらず全ての長音節に acute と circumflex の差異を認めていた。ところが今世紀中庸 Kuryłowicz が 「intonation の差異は

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

非アクセント音節では存在し得ない」("Na marginesie ostatniej syntezy akcentuacji słowiańskiej." *Rocznik Sławistyczny* 20. 1959.) なる独断をして以来、強勢音節以外での intonation の存在は一般的に否定されてしまい、非アクセント音節にも音調の差異を認めれば簡単に定義される Leskien の法則（語末 acute 短縮）や Hirt の法則（acute 音節は次音節より強勢を奪い取る）、de Saussure の法則（acute 音節は前音節から強勢を奪い取る）などの定義も困難を極めることになったしまった。これは economy からして好ましくないことであり、Garde(1976: 4f., 427f.) は旧に復して非アクセント音節にも両音調の差異を認める必要性を得々と述べている。小文でも Garde に従ってアクセント音節であるなしに関わらず acute と circumflex の対立を認める。

27)このタイプの変化形式が印欧祖語の yā/ə 語幹に対応するものなのか、バルト語の ē 語幹との関係 (e.g. Lith. žẽmė : CS. *zemī) はどうなのかなどの難しい問題が絡むが、ここでは触れないことにする。

28) Watkins や Трубачев によると印欧語の語根は *ak- であり、軟口蓋化された *akʷ- に接尾辞を付した *ak-men- をリトアニア語は保持し、スラブ語は同じ接尾辞を持つ形からメタテーゼと二次的延長を経て PS. *kā-men-> CS. *kamen- を獲得したらしい。スラブ語もバルト語もいわゆる satəm 語群に属し、祖語の *k をそれぞれ一般的に *s, *š で反映する。本来の語根である IE. *ak- はスラブ語の CS.*ostrъ、リトアニア語の ãšmenys「刃」に於いて軟口蓋化を受けずに保持されている。この語について *ak->*akʷ- と k の調音点が後ろにずれた理由、及びスラブ語に於いてメタテーゼと延長を受けた理由は説明困難である。現代のスラブ語は SCr. kàmi を除いて R. камень, Bolg. камен, Cz. kámen のように斜格の語幹を単数主格にも採用している。

29)スロベニア語の h はセルビア・クロアチア語のそれと同様に無声の軟口蓋摩擦音 [x] である。

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

略語表

1. 言語名

Arm.	Armenian	アルメニア語
Av.	Avestan	アヴェスタ
BR.	Belorussian	白ロシア語
Br.	Breton	ブルトン語
CS.	(late) Common Slavic	(後期) 共通スラブ語
Cz.	Czech	チェコ語
dial.	dialectal	方言
Fr.	French	フランス語
GAv.	Gatha Avestan	ガーサ・アヴェスタ
Gk.	Greek	古典ギリシャ語
IE.	(Proto-)Indo-European	印欧祖語
Ir.	Irish	アイルランド語
It.	Italian	イタリア語
Lat.	Latin	ラテン語
Lith.	Lithuanian	リトアニア語
Lyk.	Lykian	リュキア語
Mac.	Macedonian	マケドニア語 (スラブ語)
OCS.	Old Church Slavic	古代教会スラブ語
OCz.	Old Czech	古代チェコ語
OE.	Old English	古期英語
OHG.	Old High German	古高ドイツ語
OR.	Old Russian	古代ロシア語
Pol.	Polish	ポーランド語
PS.	(early) Proto-Slavic	(早期) スラブ祖語
R.	Russian	ロシア語
Rum.	Rumanian	ルーマニア語
SCr.	Serbocroatian	セルビア・クロアチア語
Skr.	Sanskrit	サンスクリット

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

slov., Sln.	Slovene	スロベニア語
Slk.	Slovak	スロバキア語
Sp.	Spanish	スペイン語
Toch.	Tocharian	トカラ語
Uk.	Ukrainian	ウクライナ語
W.	Welsh	ウェールズ語

2．文法形態

1.～3.	first～third person	一～三人称
N	nominative case	主格
G	genitive case	属格／生格
D	dative case	与格
A	accusative case	対格
I	instrumental case	具格／造格
L	locative case	所格／位格／於格／地格
P	prepositional case	前置格
Ab	ablative case	奪格
V	vocative case	呼格
sg.	singular	単数
du.	dual	双数／両数
pl.	plural	複数

1.pl.（一人称複数）、Nsg.（単数主格）のように、人称と格を先に、数は後に表記する。

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

参考文献

Abernathy, R. 1974. An Often Solved Problem: Indo-European *kt* in Slavic. *Topics in Slavic Phonology*. ed. by Demetrius J. Koubourlis. Cambridge, Mass.: Slavica.

Arumaa, P. 1964. *Urslavische Grammatik*. Einführung in das vergleichende Studium der slavischen Sprachen. I. Band. Heidelberg: Winter.

Beekes, R. S. P. 1969. *The Development of the Proto-Indo-European Laryngeals in Greek*. The Hague-Paris: Mouton.

Benveniste, E. 1973. *Indo-European Language and Society*. London: Faber and Faber.

Бернштейн, С. Б. 1961. *Очерк сравнительной грамматики славянских языков*. том 1. Москва: Академия наук СССР.

———. 1974. *Очерк сравнительной грамматики славянских языков*. том 2. Москва: Наука.

Bezlaj, F. 1977-. *Etimološki slovar slovenskega jezika*. Ljubljana: Slovenska akademija znatnosti in umetnosti.

Birnbaum, H. 1966. The Dialects of Common Slavic. *Ancient Indo-European Dialects*. ed. by H. Birnbaum and J. Puhvel. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

———. 1973. *Common Slavic. Progress and Problems in its Reconstruction*. Columbus: Slavica.

———. (Бирнбаум, Х.) 1987. *Праславянский язык. Достижения и проблемы в его реконструкции*. Москва: Прогресс.

Bray, R. G. A. de, 1980. *Guide to the South Slavonic Languages*. Columbus: Slavica.

Buck, C. D. 1949. *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages*. Chicago-London: The University of Chicago Press.

Endzelīns, J. 1971. *Comparative Phonology and Morphology of the Baltic Languages*. The Hague-Paris: Mouton.

Garde, P. 1976. *Histoire de l'accentuation slave*. Paris: Institut d'études slaves.

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

Hishiyama, S. (菱山 忍) 1964-67. 「ロシア語史概説」I-III. 『古代ロシア研究』4, 5, 8.

Kazama, K. (風間喜代三) 1978. 『言語学の誕生』. 岩波書店.

———. 1984. 『印欧語親族名称の研究』. 岩波書店.

Kiparsky, V. 1967. *Russishe historische Grammatik*. II. Heidelberg: Winter.

Kōzu, H. (高津春繁). 1954. 『印欧語比較文法』. 岩波書店.

———. 1960. 『ギリシア語文法』. 岩波書店.

Lindeman, F. O. 1987. *Introduction to the 'Laryngeal Theory'*. Oslo: Norwegian University Press.

Machek, V. 1968². *Etymologický slovník jazyka českého*. Praha: Nakladatelství československé akademie věd.

Martinet, A. 1956. Review of T. Burrow's The Sanskrit Language. *Word*. Vol. 12.

———. 1957. Phonologie et «laryngales». *Phonetica*. Vol.1. pp.7-30.

Mayrhofer, M. 1963. *Kurzgefaßtes etymologisches Wörterbuch des Altindischen*. Heidelberg: Winter.

———. 1986. *Indogermanische Grammatik*. Band I. 2. Halbband: Lautlehre. Heidelberg: Winter.

Meillet, A.(Мейе, А.) 1951. *Общеславянский язык*. Москва: Издательство иностранныой литературы.

———. 1967. *The Indo-European Dialects*. Alabama Linguistic & Philological Series No. 15. University of Alabama Press.

Mikkola, J. J. 1950. *Urslavische Grammatik*. III. Heidelberg: Winter.

Nahtigal, R. (Нахтигал, Р.) 1963. *Славянские языки*. Москва: Издательство иностранной литературы.

Oshiro, T.(大城光正), Yoshida, K.(吉田和彦) 1990. 『印欧アナトリア諸語概説』大学書林.

Pokorny, J. 1959. *Indogermanisches etymologisches Wörterbuch*. Bern.

Polska akademia nauk. Komitet językoznawstwa. 1984. *Słownik prasłowiański*. Tom V. Wrocław-Warszawa-Kraków-Gdańsk-Łódź-Zakład.

Popović, I. 1960. *Geschichte der Serbokroatischen Sprache*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

NII-Electronic Library Service

Osaka University of Foreign Studies

Scholz, F. 1966. *Slavische Etymologie.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Senn, A. 1966. *Handbuch der litauischen Sprache.* Bd I: Grammatik. Heidelberg: Winter.

Шанский, Н. М. (ред.) 1973. *Этимологический словарь русского языка.* том 1, вып. 5. Издательство Московского университета.

Shevelov, G. Y. 1964. *A Prehistory of Slavic.* (The Historical Phonology of Common Slavic.) Heidelberg: Winter.

Skok, P. 1972. *Etimologijski rječnik hrvatskoga ili srpskoga jezika.* Tom II. Zagreb: Jugoslovenska akademija znatnosti i umjetnosti.

Stang, Chr. S. 1966. *Vergleichende Grammatik der Baltischen Sprachen.* Oslo-Bergen-Tromsö: Universitetsforlaget.

Sturtevant, E. H. 1942. *The Indo-Hittite Laryngeals.* Baltimore: Linguistic Society of America.

———. 1943. The Indo-European Reduced Vowel of the e-Series. *Language.* Vol.19.

Трубачев, О. Н. (ред.) 1974-. *Этимологический словарь славянских языков.* (Праславянский лексический фонд.) Москва: Наука.

Tsuji, N. (辻直四郎.) 1974. 『サンスクリット文法』. 岩波書店.

Vaillant, A. 1950. *Grammaire comparée des langues slaves.* I. Phonétique. Lyon-Paris.

———. 1958. *Grammaire comparée des langues slaves.* II/1. Flexion nominale. Lyon-Paris.

Vasmer, M. (Фасмер, М.) 1986². *Этимологический словарь русского языка.* Москва: Прогресс.

Vondrák, W. 1924². *Vergleichende Slavische Grammatik.* Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Watkins, C. 1965. Evidence in Balto-Slavic. in Winter(1965).

———. 1985. *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots.* Boston: Houghton Mifflin Company.

Winter, W. (ed.) 1965. *Evidence for Laryngeals.* The Hague: Mouton.

NII-Electronic Library Service